
アイヌ民族博物館だより

THE AINU MUSEUM

2000. 11. 30

No. 46

パイワン族との交流

パイワン族は、台湾南部屏東県，台東県に住む。その子弟が学ぶ楓林国民小学校での交流。イヨマンテリムセをともに踊り，親交を深める。子供たちの笑顔が台湾原住民の今を語る。



黒川セツさんのアオバトの神謡

平成12(2000)年9月25日、26日の両日、アイヌ民族博物館において、平成12年度第3回アイヌ文化教室「口承文芸の夕べ」が開催された。この事業はアイヌ民族博物館と白老民族文化伝承保存会の共催である。

一日目は、中川裕・千葉大学教授が、翌日木村イトさん(平取町在住)が口演予定の散文説話(ウエペケレ)「古いクマの頭が助けてくれた」(萱野茂『萱野茂のアイヌ神話集成』ピクチャーエンタテインメント 1998年所収)について予備講義を行い、二日目は中川氏のほか、木村イトさん、黒川セツさん(平取町在住)のお二人を口演者に招き、散文説話と神謡(カムイユカラ)を披露していただいた。

以下は当日、黒川セツさんが口演されたアオバトの神謡と、それにまつわるお話である。なお、この神謡は黒川セツさんがおばあさんから教わった話で、当日はアイヌ語で語られたが、掲載にあたっては紙幅の都合で日本語訳のみとした。

ワオリ(アオバト神の自叙=和訳要旨)

「ワオ」と私が鳴くので、村の子供たちがそれを真似た。私は腹を立て、大川であったものを小川に変え、小川であったものを涸らしてしまった。それを見た神々は憤慨して、「そんなことをお前がするなら、湿地の国、地獄へとお前を落としてしまうぞ」と私をののしり、オキクルミ神がこのように言った。

「お前は自分の素性、どこから来たのかも分からないのか。お前は元々、遠い国、和人の国からこの北海道へ来て、山子として働いている最中に、木の下敷きになって死んだ和人の魂なのだ。それを私がお前に教えても、お前は先祖の許へ行くこともできない。だから私がお前をアオバトにして、お前は国中を巡り歩くようになったのだ」と語った。

……

中川：イヤイライケレ(ありがとう)

このお話はワオという鳥の話です。ワオドリとも言っており、その名前の通り「ワーオワオ」と鳴くのでワオといいますが、日本語ではアオバトといいます。アオバトと言っても、図鑑で見ると緑色をしています。山の中にいて鳴いているので滅多に姿は見られない鳥で、僕も鳴き声は聞いたことがありますが、見たことはありません。

白老にワオはいますか? 「ホワオー、ワオ、ワーオー」ってこんな感じで鳴く鳥。一人で山にいる時に聞くと、とっても気持ち悪いよね?

黒川：うん。寂しい感じするよね。

中川：何か子供が泣いてるような感じで、とっても寂しい声で鳴く鳥なので、この鳥の話ってというのは、今日聞かせていただいたカムイユカラもそうですけれども、あんまりいい話がありません。

話の筋は、このワオっていう鳥が「ワーオワオ」と鳴いていた。すると子供達が「ワオワオ」って鳴き真似をするもんだから、ワオが腹を立てて、大きな川だったところは水を干して小さな川にした。小さい沢だった所は干し上げてカラカラにした。それで神様たちが怒って、自分を罰して、「地獄へ落としてやるぞ」というふうに自分のことを怒ったわけです。そうすると、オキクルミカムイっていう偉い神様が「まあまあ」っていうわけで、「お前は自分の素性、自分が一体どうしてここにいるのか、どうしてこんな姿になってワオワオって鳴いているのか、どこから来たもんだか、っていうことを知らないからそんなふうに真似されて腹立てるんだ。お前の素性というのを教えてやるぞ」というわけですね。

「遠くの国、和人の国」って本州のこと?

黒川：そうね。

中川：お前は本州の方から来た和人なんだと。それがヤマンコ ヤマンコというのは?

黒川：山子のこと。

中川：山子っていうのは木を切ったりする人

ですか？

黒川：そうですね。

中川：その山子というものだったわけです。それが山で働いていて、事故で木の下敷きになって死んでしまいました。で、死んでしまったんだけど、先祖の国にも行けない。なぜ先祖の国に行けないんですか？ この和人の魂は。

黒川：やっぱり和人だから、アイヌのやり方でちゃんとイヨイタッコテ（引導渡し）して先祖の国に行くようにできなかったんじゃない？

中川：なるほどね。北海道に来た和人で、しかも事故で死んじゃって、ちゃんと葬式もあげてもらえない。そういうふうにして死ぬと、自分の先祖がいるあの世へは行けないものなわけですね。それでは気の毒だということなのか、ワオとして生き返った。ワオになってその魂がこの世に姿を持つようになったのがお前なんだ。「お前は死んだ和人の山子の魂なんだ。それがワオドリという鳥になって、北海道中を歩きまわって鳴いているのだから、それが分かったならば、お前はもう腹立てることはないんだ」とオキクルミが言って、自分の素性が分かったという話ですね。

黒川：うんうん。

中川：はい。というのが今の「ワオリ」というカムイユカラの内容でした。

類話

中川：今の話と途中まで一緒なんですけど、似た話があります。

和人の山子が山の中で道に迷ってしまって、助けを呼びながら山の中を歩いていたが、とうとう力尽きて死んでしまった。するとその死んだ体がだんだん腐っていくわけです。腐っていくと、その臭いがまわりに漂ってきて、まわりのカムイ（神）たちってというのはシリコロカムイ（木の神様）たちですが、臭くてしょうがない。なんでこんなに臭いんだっていうと、これは魂がないから臭いんだっていうので、魂を入れてやろうということになった。しかし、体がもう腐ってるので入れるところがない。一カ所だけ残っていたところがあって、それは何かっていうと、昔の和人ですから、頭にちょんまげ結ってるわけですね。そのちょんまげだけ

腐らないで残ってるわけです。で、他に入れる所がないからここに魂入れてやろうっていうんでそのちょんまげに魂を入れたら、それが鳥になってワオになりましたって話があります。だから、ワオに「お前の素性っていうのは、実は和人のちょんまげなんだよ」と。

素性ってなんで必要かという、素性が分からないと、自分が死んだときに帰っていく場所が分からない。死んだときにその魂は神の国に帰って行くわけですが、自分の素性が分からないとどこへ帰っていいか分からない。それで腹を立てていろいろ意地悪なことをするっていうことなわけです。

しかし、元が和人のちょんまげだって分かったところで、やっぱり帰って行く所がないですね。だからワオは、そういう意味でとても不幸な鳥。そんなお話もあるんですけど、そんなふうに、ワオにまつわる話っていうのは、あんまりいい話がありません。

アオバトの言い伝え

このお話、どんなふうにして自分のおばあちゃんから聞いて、その時にどんなこと言われたのか、それについてちょっとセツさん、お話ししてください。

黒川：このワオドリのお話は、私が7～8歳のころ、私のフチ（おばあさん）に教えられたものです。教えてくれたのは、次のようなことがあったからでした。

私のフチが山にシナ剥ぎ（シナノキの皮剥ぎ。内皮を縄や織物にする）に行きました。シナ剥ぎですから6月の末から7月ごろでしょうか。そしたら暗くなっても帰って来ないので、村の人たちがみんな心配して探しに行きました。

フチは、行った山でシナ剥ぎも終わり、座って皮むきをしていたそうです。すると、そばの木の上でワオドリが、全然よそに行かないで「ワオワオ」とずっと騒いでいる。「何でお前、私のそばから離れないでそんなこと言って。いい加減にしないとお前をパカッヌ（～を罰する）するぞ」と言ってフチが怒ると、そのうちワオドリもどこかへ行ってしまいました。

フチはやがて荷物も出来たので帰ろうと思いい、山から降りてセタナイ沢に出ました。もう夕方で暗くなってきたので、道に迷うと困ると

思い、沢に木の葉を流しました。流れた方に下がれば家に帰れると思ったのです。ところが、木の葉は川下の方へ流れないで、逆に山奥の方へ流れて行ったのです。フチはそうとも知らず、木の葉が流れる方向へ行ったところが、とんでもない山奥へ迷いこんでしまいました。「もしかしたら道に迷ったかもしれない」と気がついたときにはすでに辺りは真っ暗で、家に帰ることもできません。

フチはその場に座って考えました。「自分が座ってシナを剥いているそばで、ワオがずっと鳴いていたけど、あの悪いワオが私をそそのかして道に迷わせたんだな」と思って、家に一人おいてきた孫を心配していましたが、どうすることもできません。そのうちに「オーイオーイ」と騒いぎながら村人たちが迎えに来てくれ、何とか無事に家に帰り着くことができました。

その頃は電気もなければランプもない時代です。フチがいれば棒にガンピ（樺皮）を挟んで火をつけてくれるのですが、私はまだ子供でしたからそれもできず、真っ暗な家の中で一人で泣いていました。そのうち村の人たちが集まってきてガンピの皮に火をつけてくれて、やがてそこに村人と一緒にフチが帰ってきました。

フチはおいおい泣きながら、「お前も大変だったべ。心配だったべ。だけどフチも何とかみんなに助けられて家に帰ってきたから」と言って、その晩はワオドリの話をすることもなく終わりました。

採ってきたシナは割いて、縄に縋って売っていました。フチはそのシナを割いたり縄縋いしながら、道に迷ったときのことをウパクマ（言い伝え）のようにして私に語ってくれました。「フチはこういうことでワオにだまされて道に迷い、あんな夜遅くまで家に帰れなかったんだから、お前が大人になって山歩きするようになって、ワオドリがそばから離れないで鳴いたときは、絶対自分の帰る道確かめて帰るようにしなさい」と。

私もその話を聞いて、「いやあ、恐ろしいものだ」と思うようになりました。私もだんだん大人になって、山へ薪採りに行ったり、畑に行ったりするようになりましたが、ワオドリがちょっと離れて鳴いていても、ワオぐらい恐ろしいものはないと思って近くに行けなかったもの

です。そのワオドリも最近はどこへ行ったのか、鳴き声もあまり聞かなくなりましたが、私の家は平取の山奥ですから、昔はワオドリがたくさんいました。沢の中でも山の中でもどこでも鳴くものですから、みんなにもワオってというのは本当に恐ろしいものだ、あんまりワオドリが鳴いたときにはよく気を付けなさいよ、と教えて今まで来ました。

……

私自身もこの年になるまで、ワオドリでいろんな経験をしました。ワオドリがあんまり鳴いたときには必ず人死んだりとか。

セタナイ沢に行ったときに、ワオが、田んぼの草取りしてる私のそばから離れないでワオワオ騒いでいたら、その日に、入院していた近所の娘さんが亡くなったこともありました。私と一緒に出面（賃仕事）に歩いた娘でしたから、もしかしたらその娘の魂が私の所に来たのかなと思ったりしました。

また、もう15～16年前の話です。うちの従兄の嫁さんが田んぼの青刈りに行っていたので、それを手伝いに行ったのですが、その人が見あたりません。きっと田んぼに行かないで帰ったのかもしれないと思って、うちの昔の墓地の方へと山を登って行くと、その山でやっぱりワオドリがワオワオと騒いでいます。山一つ越えてもまだ私についてきて騒ぐので、さすがに気味が悪くなって、「何でおまえこんなに私の後についてこなきゃならないのよ。もしかしたらお前、誰かの魂なんでないのか？」といいながら家に帰ってくると、その嫁さんが田んぼで急死したという知らせが飛び込んできました。急いで行ってみましたが、もう車の中で死んで伸ばされてありました。

あの時、私について山一つ越え、家の近くまできても鳴きながらずっとついてきたワオが、実はこの人の魂だったんだな、お前は死んでワオドリになって私について歩いていたのか、と言いながら病院へ連れていきましたが、心筋梗塞で全然だめでした。だからワオドリというのはほんとうに恐ろしい鳥で、私も恐ろしい目にあってきました。

（文責：安田益穂）

台湾原住民パイワン族 との交流

はじめに

アイヌ民族博物館は、1994年から、台湾原住民と文化交流を続けている。その契機となったのが、同年9月、白老町で開催された「'94先住民国際フェスティバル」への、台湾基督長老教会聖經学院「山音団契」一行14名の参加であるが、さらに、1997年12月、行政院原住民委員会設立一周年を記念して、台北市他、台湾国内各地を会場として開催された「世界原住民文化芸術祭」に、当館職員並びに白老民族芸能保存会会員が参加したことにより、その交流を確たるものとした。

爾來、台湾原住民との交流は、行政院原住民委員会を窓口として、今日に及んでいる。

台湾原住民 パイワン族

周知のとおり、台湾原住民は、現在、アミ、タイヤル、ブヌン、ルカイ、サイシャット、ツォウ、ヤミ、プユマ、パイワンの9族に分けられる。総人口は、1996年の数字で369,251名、そのうちパイワン族は66,322名を占める。ちなみに、最も人口の多いのがアミ族で、138,646名を数える。

パイワン族は、台湾の南部、屏東県、台東県の丘陵・山麓地帯に居住している。古い時代には、世襲制の首長と平民という社会構造（階級制度）を有していた。

パイワン族の伝統芸能で特徴的なのは、たとえば、男女二人の恋愛から結婚に至るまでを踊りで表現するなど、その舞踊にストーリーをもつものがあるということである。故に、一曲が10分を超えるものもある。他の原住民同様、パイワン族もまた時の流れとともに、文化変容を余儀なくされている。

交 流

今回、アイヌ民族博物館が交流を行ったのは、屏東県獅子郷楓林村に住むパイワン族で、「楓林文化芸術団」メンバーを中心とした人たちで



楓林国民小学校



楓林国民小学校児童によるパイワン族の踊り



楓林国民小学校児童によるヤミ族の踊り



サロロンチカプリムセを舞う

ある。

「楓林文化芸術団」は、1999年11月と本年10月の二度、来道している。今回は、当館の招きで来道し、千歳市で開催された「アイヌ民族文化祭」に参加後、白老町内の小学校にて児童と交流 伝統舞踊公演など、当館では、チセにおいて、交流会が催され、団員、職員がそれぞれ伝統舞踊を披露し合い、飲食を共にした。

本年10月は、浦河アイヌ文化保存会の招きで来道したもので、同保存会の設立40周年記念式典に出席、伝統舞踊公演を行うなど、3日間を浦河町で過ごした後、9日、当館に来館した。団長の戴錦花氏とは1年ぶりの再会で、夕刻、開催された交流会も更なる盛り上がりを見せた。

こうした交流を踏まえ、本年11月13日・14日、当館役職員12名は、台湾屏東県獅子郷楓林村を訪問したのである。なお、今回の訪問には、白老町長見野全氏も同行され、ともに交流を行った。

まず、最初の訪問先「楓林国民小学校」では、バスを降りるや全校児童約70名、戴錦花校長はじめ全教職員の歓迎を受けた。次いで、同校児童によりパイワン族やヤミ族の踊りが披露された。返礼として、我々は、ムックリ、サロロンチカプリムセ、イヨマンテリムセを披露した。

いうまでもなく、同校児童は全員がパイワン族の子弟であるが、単にパイワン族の踊りだけでなく、ヤミ族の踊りなど、他族のものも習得している。

楓林国民小学校はまた、民族文化の伝承・保存活動を教職員、児童が一体となって積極的に行っており、その一つの成果として、児童が製作した伝統工芸品が校内いたる所に展示されている。民族文化伝承・保存を実施するうえで、大いに示唆を与えられた。

小学校訪問後、村内の主たる人たちと昼食、夕食を共にしたが、いずれも料理はパイワン族の伝統料理で、特に昼食には、最高のもてなしといわれる「山豚」が出された。美味であった。

翌日、台湾行政院原住民文化園區（原住民文化を紹介する国立の野外博物館）見学後、三地門郷公所（日本の役場にあたる）を訪問した。郷長はもちろんパイワン族で、同所において、原住民主導による行政のあり方を実見した。



原住民文化園區。伝統舞踊公開の最後は、観客も踊りの輪に入る



三地門郷公所訪問

おわりに

今回の屏東県獅子郷訪問は、わずか2日間という短期間ではあったが、多くのことを学ぶことができた。台湾原住民は、キリスト教の普及、あるいは交通網の整備等による都市文化の村への流入などによりその生活文化も大いに変化した。その基本となるところは保持され、受け継がれている。台湾原住民の今に、「変容させない文化」と「変容した（させた）文化」、ともに後世に伝えなければならないことの重要性を改めて確認した次第である。

最後に、本パイワン族との交流には、多くの人たちのご協力を仰いだ。なかでも、前行政院原住民委员会主任委員華加志氏には、2日間、行をともしにいただき、便宜を図っていただいた。また、二宮一朗氏には、台北市から駆けつけていただき、通訳その他をお願いした。両氏に深甚なる謝意を表する次第である。

「文化交流」は、表面的な、単に一度だけの出会いに終わらせるのではなく、出会いを重ね、心の通うものでありたい。アイヌ民族博物館は、その想いを台湾原住民に持つ。

（秋野茂樹）

博物館短信

8 月

- 1日 月初カムイノミ
1-15日 帯広市「アイヌ文化展」資料貸出（民具資料41点）
4-8日 西暦2000年世界民族芸能祭出演（堺市 = 16名）
8-9日 華加志氏（台湾原住民委員会前主任委員）・二宮一朗氏来館
11-14日 ムックリ製作体験講師派遣（広島県立歴史民俗博物館 = 村木美幸，中村宏）
13日 アイヌ工芸品展展示解説（同 = 村木美幸）
17日 祖先供養祭（シンヌラッパ）
19-20日 道・北海道ウタリ協会主催「アイヌ民芸品展示会」ムックリ製作体験講師派遣（千歳 = 野本正博，倉部テル子，水野練平）
21-26日 アイヌ工芸品展中間検品立会（広島県立歴史民俗資料館 = 児玉マリ，村木美幸）
同展チセ撤収（同 = 野本正博，塩田知治）
26-27日 ガマ採取（青森県森田村）
29日 国連大学グローバルセミナー古式舞踊公演（札幌 = 12名）
30日 厚生省社会援護局長一行来館
30-9月1日 全日本美容業環境衛生同業組合連合会「伝統衣装研修」資料貸出（民具資料15点）
同展示・解説（東京 = 本田優子，山丸郁夫，野本正博，田村聡衣）

9 月

- 1日 月初カムイノミ
アイヌ文化振興等施策推進北海道会議委員就任（村木美幸 = 平成13年3月末まで）
1日-11月21日 沙流川歴史館「掘り出されたアイヌの遺物」展資料貸出（板綴舟模型1点）
2-8日 アイヌ工芸品展チセ展示作業（名古屋市博物館 = 山丸郁夫，野本正博）
3-7日 同展展示協力（同 = 児玉マリ，村木美幸）
7日 同展内見会展示解説（同 = 村木美幸）
胆振管内高等学校初任者研修「アイヌ民族の歴史と文化について」受入（7名）
8日 アイヌ工芸品展開会式出席（名古屋市博物館 = 山丸理事長，児玉マリ，秋野茂樹，村木美幸）
9日-9月11日 アイヌ文化フェスティバル古式舞踊公演（名古屋 = 18名）
12日 第二回理事会・評議員会
17日-10月1日 「ロシア・アイヌ資料の総合調査研究」極東博物館調査派遣（ロシア = 村木美幸）

- 18-20日 ボルボ・クロスカントリー千歳プレス試乗会古式舞踊公演（千歳 = 12名）
22-25日 ムックリ製作体験講師派遣（名古屋市博物館 = 中村宏，藤谷千賀子）
23-24日 ペッカムイノミ / 白老チエフ祭
25-26日 第三回アイヌ文化教室「口承文芸の夕べ」開催（講師：中川裕，口演：黒川セツ，木村イト，受講者のべ117名）
25-27日 パルンペー行チセ宿泊体験
27-28日 アイヌ文化活動アドバイザー派遣事業「大阪府立吹田高校における講演・ムックリ演奏」講師派遣（大阪 = 野本正博）
29日 第17回電気工事業全国大会古式舞踊公演（札幌 = 15名）

10 月

- 1日 月初カムイノミ
5日 平成12年度ブロック別町内会活動研究協議会古式舞踊公演（白老 = 12名）
7-10日 アイヌ文化振興財団主催「アットゥシ・イテセ実演会」職員派遣（名古屋市博物館 = 野本テツ子，下河ヤエ）
9日 パイワン族との交流会
10-14日 アイヌ工芸品展撤収（名古屋市博物館 = 野本正博，塩田知治）
12-13日 アイヌ文化活動アドバイザー派遣事業「岸和田市立産業高等学校における講演・料理実習」講師派遣（大阪 = 村木美幸，久保紀子）
14日 日本鑄造工学会第137回全国講演大会ムックリ演奏公演（室蘭市 = 高橋志保子，田下千代子）
19日 曾健次台湾カトリック司教一行来館
20日 ハンティ族との交流会（当館1号チセ）
21日 えーぞミレニウム国際民俗芸能祭（札幌 = 17名）
21-23日 アイヌ文化賞・奨励賞授賞式出席（東京）
22日 北海道・東北ブロック民俗芸能祭出演（札幌 = 16名）
23日 聞き取り調査（平取 = 本田優子，村木美幸）
23-26日 北海道修学旅行・観光客誘致団参加（仙台市，盛岡市，秋田市 = 山丸郁夫）
26-27日 北見工業大学「国際文化フォーラム」講師派遣（北見 = 本田優子，村木美幸）
27-28日 アイヌ文化ビデオ鑑賞会講師派遣（東京 = 秋野茂樹）
29-31日 文化財保護法50年記念会出席（東京）

11 月

- 1日 月初カムイノミ
冬季営業体制（11～3月，開館時間8:30～16:30）

- 3-4日 「イヨマンテの聞き取り調査」(三石=本田優子, 村木美幸)
- 4-6日 アイヌ文化活動アドバイザー派遣事業「仙台市中央市民センターにおける講演・ムックリ製作」講師派遣(仙台市=野本正博, 中村宏)
- 12-17日 台湾観光プロモーション・パイワン族との交流(台湾=山丸理事長以下15名)

- 14-19日 東本願寺「共なる世界を願って - アイヌ民族復権運動・文化伝承の取り組みについて」アイヌ展展示協力(京都=野本正博)
- 15日-12月15日 同展資料貸出(民具資料22点)
- 20-23日 北海道・北海道国際観光テーマ地区推進協議会他主催「韓国・北海道観光プロモーション」参加

新入職員紹介

轟 淑珮



1978年、中華民国台中生まれの22歳。台北私立輔仁大学卒。2000年9月1日付けでアイヌ民族博物館伝承課伝承係に採用。当館では主に台湾・香港からの来館者に対し、アイヌ文化に関する中国語(北京語)解説を担当。また、来日3か月にしてすでに10月9日の台湾パイワン族来道、11月12~17日の台湾原住民との交流事業等で、通訳として日台先住民の交流に一役買っている。

……

一人の外国人、しかも女性。日本のもっとも北にある北海道へ、いったい何をしに来たのでしょうか？これはたぶん、多くの人が私に対して聞きたい質問じゃないかなと思います。

これに答える前に、まず私が聞きたいのは、皆さんは自分がどんな人だと思いますか？「ほかの人と変わらない普通の人だよ！」と思いますか？それとも、「いや、私はほかの人と全く違う人だ」と思いますか？私も日本に来る前は、自分はごく普通の台湾人だと思っていました。しかし、日本に来てから、だんだん自分がほかの人と違うことに気づき始めました。

国籍、パスポートの色、言葉が違うのは、言うま

でもなく私が外国人だということを証明しています。しかし、その言葉こそが、私が日本に来ることができた鍵となっているのです。台湾からの来館者が増え、中国語の通訳が必要だということで、私が採用されたわけです。

通訳は、訳すことを前もってある程度理解していなければなりません。ですから、実際には通訳のほか、アイヌ民族についての本なども読んで、アイヌ文化をより深く理解するよう努めています。

台湾からのお客様の中にも、アイヌ文化にとっても興味をもって、いろんな質問をする人がいます。私は質問に答えながら、自分が博物館にいるただ一人の中国語が話せる人間だということを実感しました。またこのことによって、博物館での自分の居場所が見つかって、この仕事の重要さを初めて理解したのです。ですから、この点で、自分が博物館のほかの人と違う人だと思い始めたのです。そのおかげで、毎日の仕事を頑張りつづけることができました。

日本に来ることを決めた時に、ある先生に「これであなたの人生は変わるのよね」と言われました。確かに博物館に勤めてから、私は台湾にいれば絶対に経験できないことをたくさん経験しました。また、アイヌ民族と台湾原住民との交流の中で、逆に自分の国のことをより深く知ったのです。これは来日前には予想しなかったことでした。

私は博物館の人々に接して、自分が前から思っていたいろいろな考えを変えました。もちろん、変わるのには良いことも良くないこともあります。しかし、自分を変えることによって人間は成長していくのではないのでしょうか？今の自分は、博物館の皆さんの力で、より良く変わっていると信じています。

(轟 淑珮)

アイヌ民族博物館だより No.46

発行 財団法人アイヌ民族博物館
〒059-0902 北海道白老町若草町2丁目3-4
電話 0144-82-3914 FAX 0144-82-3685

THE AINU MUSEUM 2000. 11. 30

ホームページ <http://www.ainu-museum.or.jp>
Eメール museum@ainu-museum.or.jp
印刷 株式会社北海道機関紙印刷所